ISSN 1342－8071

ZEPHYROS

1999年
第5号

国立西洋美術館ニュース　ゼフュロス
The National Museum of Western Art, Tokyo

エルミタージュ美術
ーフィレンツェとヴェネ

国立西洋美術館でこれまで開催された展覧会をふりかえると、イタリア・ルネサンスの作品だけで構成された大規模な展覧会としては、1980年にイタリア政府の全面的な支援で実現した「イタリア・ルネッサンス美術展」、1993年にローマ法王庁のご好意によって開催された「ヴァチカンのルネサンス美術展」のふたつがあります。今回、ロシアのサンクト・ペテルブルクにある世界でも有数の大美術館、エルミタージュのご協力によって、3度目のルネサンス美術展が実現することになりました。

6年前の展覧会はルネサンス時代のローマをテーマとしたものでしたが、今回の展覧会の特徴は、やはりルネサンス美術の大中心地だったフィレンツェとヴェネツィアの美術を紹介することにあります。

ルネサンス時代には、イタリアは統一された国家ではなく、フィレンツェ、ヴェネツィア、ローマ(教会領)、ミラノなど、多くの独立国が割拠する状態にありました。これらの都市国家は、政治や経済だけでなく、文学や芸術の分野でもそれぞれ独自の伝統をもっていました。

イタリア中部、アルノ河の畔に広がる古都フィレンツェでは、15世紀から16世紀にかけて、メディチ家をはじめとする都市の大商人たちの庇護の下で、イタリア全土に先駆けて文学や芸術に革新的な成果が生み出されていきます。一方ヴェネツィアは、イタリア北東

ボニファツィオ・ヴェロネーゼ
《聖家族と諸聖人》
1525-28年頃
©The State Hermitage Museum, Saint Petersburg

目　　次

エルミタージュ美術館所蔵イタリア・ルネサンス美術展…2
主任研究官　越川 倫明
記憶された身体ーアビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫…4
研究員　佐藤 直樹

ロダン作《地獄の門》の修復と免震化……5
主任研究官　河口 公生
'99年度展覧会スケジュール ……5
エッセイ　「上野の杜」発 ④ ……6
「伊豆榮」若女将　土肥 好美
財団インフォメーション……7
ゼフュロスギャラリー

館所蔵 イタリア・ルネサンス美術展
ツィアー

会期:1999年3月20日(土)〜6月20日(日)
主催:国立西洋美術館/NHK/NHKプロモーション

部、アドリア海の最奥に位置する海上の都です。東地中海を舞台とする貿易を通じて莫大な富を蓄積したヴェネツィアは、ドージェと呼ばれる非世襲制の国家元首の下、北イタリアに広大な領土をもつ一大共和国として繁栄を誇っていました。

これらの都市が、ルネサンス文化の重要な中心地となったのは、偶然ではありません。フィレンツェは進取の気性に富んだ商人と企業家の町であり、かたやヴェネツィアは冒険心に溢れた豪商や船乗りが集まる活気に満ちた国際都市でした。彼らの豊かな経済力や知的好奇心、新しい文化を追い求める態度が、ルネサンス美術の発展の推進力だったのです。

フィレンツェ派とヴェネツィア派は、互いにさまざまな影響関係をもちながらも、ひじょうに異なった傾向の美術を発展させていきました。理知的・理論的傾向の強いフィレンツェの芸術家たちは、デッサン力、立体感、幾何学的構成を重視して作品を創造したのに対し、ヴェネツィア派の芸術家たちはより感覚的・情緒的な画風を好み、特に色彩と光の表現に新境地を拓いていきます。こうして、フィレンツェ派とヴェネツィア派の美術は、その後の西洋美術の発展を支える二つの柱ともいうべき伝統をつくりあげていきました。

展覧会は、エルミタージュ美術館の所蔵品から絵画45点とブロンズ彫刻15点、さらに、国立西洋美術館が所蔵するルネサンス絵画11点を参考出品として展示し、合計71点で構成します。出品作の多くは現にエルミタージュ美術館の常設展示室を飾っている選り抜きの名品で、ラファエッロ、アンドレア・デル・サルト、ティツィアーノ、ジョルジョーネ、ポントルモ、ロッソ・フィオレンティーノ、ティントレット、ヴェロネーゼといった著名な巨匠たちの作品が中心になっています。会場では、フィレンツェ派とヴェネツィア派の作品を、時代を追って対照的に展示いたします。それぞれの個性と魅力を、存分に味わっていただければと思います。

(主任研究官　越川 倫明)

ナルディーニ
《バテシバの水浴》
1570年代半ば頃

ポントルモ
《聖家族と洗礼者ヨハネ》
1521-27年頃

アルベルティーナ版画素描館より

記憶された身体—アビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫

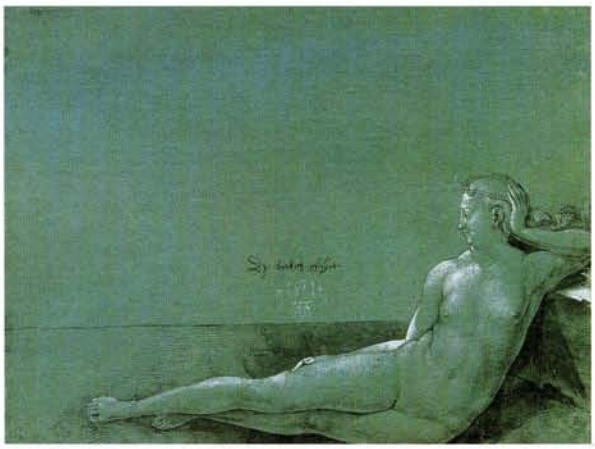
会期:1999年7月6日(火)−8月29日(日)
主催:国立西洋美術館/アルベルティーナ版画素描館/財団法人西洋美術振興財団

アビ・ヴァールブルクは、ルネサンス美術に繰り返し登場する古代に範をとった身体表現に興味をもち、ひいてはそうした現象、すなわちルネサンスが起こる理由を心理学的な視点から問い続けた20世紀初頭の美術史家です。この展覧会はヴァールブルクの主要な研究テーマであった人体表現の歴史に焦点を絞り、ウィーン、アルベルティーナ版画素描館の版画素描70点、オーストリア国立図書館のラファーター・コレクションの彩色素描36点を中心に彼の研究を再検討するものです。

会場は5つのセクションから構成され、まず、セクション1では、導入部として「西洋における身体表現とはなにか」と題し、西洋美術における代表的な身体表現が展示されます。初めにこれらの代表的な身体表現の類型を把握してもらうことがこのセクションの狙いです。

続くセクション2では、ルネサンス美術において盛んに研究された「理想的な身体プロポーション」が展示されます。デューラーに代表される様々な芸術家たちが取り組んだ古代に範を求めた「理想的身体」の追及は、西洋の美術史を語る上では欠かすことができません。

セクション3ではヴァールブルクが考察した重要なモチーフの一つである手を主題として、「瞑想する手」と「活動する手」という二つのタイプの手の表現を見ていきます。ヴァールブルクによって未完のまま残された西洋美術史を考察するための作品図集「ムネモシュネー・アトラス」(この写真資料はセクション5に展示)に、現代版のアトラスを二枚、新たに作成してみようという試みです。



アルブレヒト・デューラー
《横たわる裸婦(ニンフ)》1501年　ペンとインク
アルベルティーナ版画素描館蔵

セクション4では、ヴァールブルクがしたような、身体イメージ蒐集の先行例として、スイス18世紀の神学者ヨハン・カスパー・ラファーターが画家たちに模写させた美術作品の身体部分を展示します。これらは、後世に多大な影響を与えることとなる有名な書『観相学的断片』の挿絵のための準備素描でした。「画像の蒐集/記録」という視点から、ラファーターとヴァールブルクを比較します。

作者不詳
《影絵装置》1797年　ペン
オーストリア国立図書館蔵

最後のセクション5では、ヴァールブルクが計画した「ムネモシュネー・アトラス」を写真パネルと復元原寸大モデルで展示します。未完のまま放置され、現在では写真資料しか残されていない「アトラス」が日本で展示されるのは初めてのことです。

近年、ヴァールブルクの研究は再評価されています。なぜなら、美術史の新しい思考モデルが求められている現在と、ヴァールブルクが活動した当時の状況、すなわちイコノロジーと呼ばれる新しい美術史学が胎動していた状況が似ているからです。連続して並べられた作品のイメージから美術史的な思考を試みること、これこそヴァールブルクが行った方法論ですが、本展は、それを再現することが目的ではありません。ヴァールブルクが「したように」作品は選択され、展示されますが、それはいわばヴァールブルク的思考の現代版といえるものです。そして、鑑賞者一人一人が、この展覧会から自らの美術史的発想を得ることが出来れば、本展の目的は達成されたと言えるでしょう。袋小路に入り込んだかにみえる現代の美術史研究に活力をもたらすヒントが、そこに隠されているかもしれません。

(研究員　佐藤 直樹)

ロダン作《地獄の門》の修復と免震化

美術館の前庭に穴を掘って新しい展示室を作ることになったのはいつのことだったろう。その頃から《地獄の門》は館内の空き地を転々と移動することになった。人目に触れず、落ち葉の降りかかる建物の片隅に放置されていたのが、新展示室の完成とともにやっと再び展示される運びとなったのは、4年以上も経ってからだ。

鋳造されてから70年以上を経過した《地獄の門》は基礎となる足元を支える内部の鉄骨が腐り始めて、かねてより修復の必要が取りざたされていた。いつやるかはお金と技術そして何かのきっかけだった。技術については安全な方策を検討する必要があったが、この4年間と時間があったので、パリまで行って調査と具体的な方法の見通しを立てておいた。今年の7月の補正予算で、やっと資金的な目処がついて喜んだが、同時に武者震いがした。

実はパリのロダン美術館の《地獄の門》は今から10年以上も前に、同様に鉄骨の取り替え工事を行っていて、表面も修復処置されている。彼等にとっても初めてのことだったが、その時の記録は残念ながら作られず、行程の写真さえなく当時の処置を担当した者に口頭で聞くしかなかった。私が最も悩んでいたことは内部の鉄骨を彫刻そのものにストレスを与えず、どの様に除去し新しいものと交換できるかという技術だった。しかし聞いてみて何のことはなかった。「彫刻面を下に寝せて除去する以外に無い」と言われてその危うさに溜息が出たが、そう納得して注意事項だけ聞いて帰国した。

地獄の門の表側をスポンジとウレタンで養生を始めたところ

いずれにせよ当館学芸課にとって過去最大の所蔵品の修復だ。作品そのものに傷はないが、新しい骨組みと交換することと、彫刻表面に緑青が吹いて見てくれが悪くなっているのを改善するのは経験の無い者にとって大仕事である。

それから修復と同時に阪神大震災から学んだ教訓によって彫刻の免震化の話に展開した。彫刻の重量が8.5トンで18の鋳造部分を組み合わせて出来ている以上、地震の揺れで組んである形が崩れる恐れがある。前庭の彫刻の免震化は当然の成り行きだった。計画では《地獄の門》は最終的に前の状態とは見た目少しばかり異なる形の台の上に載せる。しかし今度はこの台は地震が来たり風が吹いたりするとユラユラと動く乗り物になる。いや地震の時には、地面や人が動いていても彫刻は元の位置に留まろうとして止まっているような動きになるはずだ。もし「運が良ければ」地震の時に《地獄の門》の扉は開いたりしないけど、門がユラユラするのを見ることができるよ。　（主任研究官　河口 公生）

'99展覧会
スケジュール

オルセー美術館展　1999

19世紀の夢と現実

会期：1999年9月14日（火）～12月12日（日）
主催：国立西洋美術館／オルセー美術館／日本経済新聞社

1996年に東京都美術館、神戸市立博物館で催されて好評を博した展覧会「オルセー美術館展　モデルニテー パリ・近代の誕生」（国立西洋美術館学術協力）を引き継ぎ、発展させる形で企画されたのがこの展覧会です。今回のテーマは、19世紀ヨーロッパ美術に見られる二つの大きな流れ、つまりロマン主義的、理想主義的な傾向とあくまで現実を見つめようとするレアリスムの傾向に焦点をあてています。それら二つが互いに対立しながらも溶け合い、さらに新たな表現へと向かっていくダイナミズムそのものを捉えようとする試みです。

この展覧会はそれぞれ固有のテーマをもった五つの大きなセクションで構成され、絵画、彫刻、工芸、建築デッサン、素描、写真など、多様なジャンルの作品から成っています。出品作品はいずれもフランス国立パリ・オルセー美術館に所蔵される質の高い作品で、その中にはマネ、モネ、ファン・ゴッホ、アンリ・ルソーらの美術史上名高い作品が含まれています。また展覧会のテーマと共に、オルセー美術館のコレクションの全体像を概観できるようにも配慮されています。

ピエール＝オーギュスト・ルノワール
《習作：若い女性のトルソ、陽の効果》

土肥　好美（どい　よしみ）
東京都文京区湯島に生まれる。平凡なＯＬ生活を送っていたが、３年前、実母である８代目女将の病気を期に、260年の伝統を誇る鰻割烹の老舗「伊豆榮」の若女将として未知の世界に飛び込む。数々の苦労も持ち前の負けん気とバイタリティで乗り越え、８代目の女将を目標に日々奮闘中である。

あきない町・あきないの町・うえの

「上野ってどんな所？！」って時々尋ねられますが、そんな時私は「居心地のいい所よ。」と自信を持って答えますね。すると「どうして？」と必ず返ってきます。で、その「どうして？」について少々お話しさせていただきます。

「上野」は芸術家も文化人も一般の方々も、それこそ老若男女を問わず、ともかく親しみやすい町。音符に例えるなら『ドレミファソラシ』全音階がある町とでも言いましょうか。どこかに必ず自分に合った音階があり、居心地のいい場所があるんです。例えば、美術館・博物館を訪れる文化人や学生さん、動物園へやってくる家族連れやアベック、広小路の老舗やアメ横に買物に来る人達等々、どんなニーズにも応えてくれる。ほんとに不思議な町ですね。

そうなんです。上野は飽きない町なんです。上野の杜を入っていくと美術館・博物館・動物園・東照宮・清水堂などどれ一つ取っても一日では足りないくらい沢山の見どころがあるんです。杜を抜けて一歩町へ出掛けても、アメ横を中心とした上野商店街や鈴本演芸場、上野駅前を通って昭和通りに出るとバイク街など、いつも沢山の人で賑わっています。その賑やかな大通りからもう一歩路地に入ると、そこにはとんでもなく古い老舗が何軒か見受けられます。蕎麦屋・櫛屋・草履屋などの下町ならではの町並み。店内に入るとこだわり派の江戸っ子店主が「いらっしゃい」と声を掛けてくれる。それが何とも“粋”ですよね。

私は、時々ジョギングに出掛けます。ノーメイクでジャージ姿。走る時間帯は人通りの少ない午前７時頃。コースはもちろん上野公園内。水上音楽堂横からスタートして、花園稲荷を横目に噴水広場へ。ぐるっと廻って弁天堂へ戻り、ボート池を左手に見ながら不忍池の周りを大きく廻る。約1.5km位でしょうか。走っているあいだ感じるのは「自然」ですね。もともとミレーやコローの風景画が好きな私。都心ではほとんど見かけない光景にどこか惹かれるんですよね。

上野の杜の四季折々の景色には何とも言えぬ趣があります。春は桜、夏は蓮や柳、秋は紅葉、冬は牡丹や梅などの数多くの木々や草花、池の水面の輝き、鳥たちの元気な姿（冬は足元にまとわりつく鴨さんに呼吸を乱されることもありますが…）等々。緑が少ない都会で、近くにこんなにも自然の息吹を感じる事ができるなんて私は何て幸せ者なのでしょう。

現在リハビリ中の母も、毎朝父と一緒に公園内を散歩しています。両親に限らず、絵を描く人、写真を撮る人、歌を詠む人など色々な人が様々な目的で朝早くから公園に出掛けてきます。せめて一時だけでもと心のリラクゼーションを求めているのではないでしょうか。

上野に住んでいても「上野」を知り尽くしているわけではありません。それを感じさせてくださるのが“お客様”。私の家は代々鰻屋を営んでおります。展覧会帰りや買物帰りのお客様のお話を伺っているうちに「私も行きたい。」という衝動に駆られることも多いですね。美術館等を訪れると海外から沢山の方々がいらっしゃっていることに驚かされます。諸外国の美術品が一同に集まる所は東京中ここだけ。それだけに、海を越えてこんなにも多くの人が集まるのでしょう。また、日本古来の文化に触れるためにいらしている方々も多いと思います。“文化の杜”と言われる由縁がわかるような気がいたします。

お客様との出会い、大切ですね。父はよく「飽きずにやるから商いなんだ！」と言います。店に出るようになってから、この言葉の意味が何となくわかってきたような気がします。多くの商店の人々も同じ思いでいるに違いありません。それが、この町の“伝統”なのでしょう。

根っからの下町っ子の私といたしましては「また、上野に行ってみたい。」という人が増えてほしい。そう思う今日この頃です。

★ミュージアム・ショップからのお知らせ★

国立西洋美術館ミュージアム・ショップもリニューアル・オープンして半年がたちました。
入り口から向かった正面の通路をはさんで、右側に書籍コーナー、左側にグッズコーナーが設置されています。

このたび新設された書籍コーナーには、西洋美術に関する書籍はもちろんのこと、ジャポニスムに関連した日本美術の本も並んでいます。
美術入門書から大型の画集まで、「ここに来れば探していた本が見つかる」「こんな本が欲しかった」というような、みなさまに愛される書籍コーナーになっていきたいと思います。

またグッズコーナーでは、国立西洋美術館の出版物をはじめ、所蔵作品をデザインに扱った絵はがきやテレホンカード、レターセット、ハンカチ等を販売しています。
館内におかれているアンケート用紙の、みなさまのお声も参考にさせていただき、新アイテムを企画してショップの充実をはかっていきますので、このようなグッズが欲しい等具体的にご要望をお寄せいただけたら幸いです。

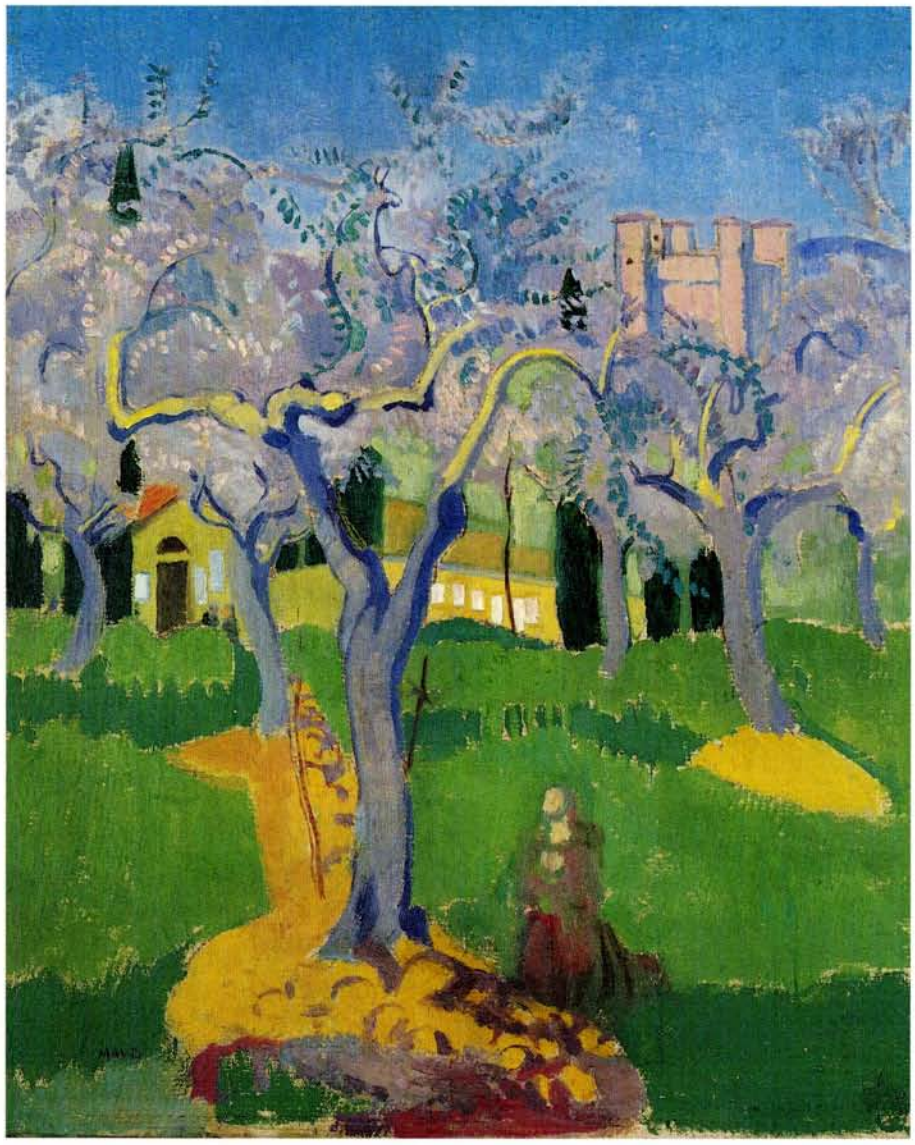
レストラン、ミュージアム・ショップは観覧券なしでご利用いただけますのでお気軽にお立ち寄りください。
ご来店をお待ちしています！

■価格一覧表
税別（テレカ、イタリア素描展を除く）

No	アイテム	単価
1	名作選	2,000
2	ルーベンスカタログ	4,500
3	宗教改革時代のドイツ木版画展	2,000
4	イタリア素描展	2,500
5	交差するまなざし	2,200
6	ロダン展（於　萬記念館）	1,800
7	愛と生命の響き	2,000
8	マリオット小企画展	2,500
9	描かれたふしぎな世界を旅する	400
10	どうして像はつくられたの？	400
11	ものがたりの森	500
12	絵はがき	77
13	額絵	200
14	クリスタルボード	3,500
15	メッセージカード	300
16	絵はがきフレーム　A	900
17	絵はがきフレーム　B	1,500
18	テレホンカード	800
19	グリーティングカード	250
20	ミラー	800
21	ハンカチ	800
22	コンパクト（あぶらとり紙入りケース）	2,100
23	フェイスペーパー（あぶらとり紙）	380
24	レターセット	400
25	ファイル	250
26	下敷き	300
27	シール	100
28	一筆せん	300
29	ペーパーバッグ	200
30	マネ絵はがきセット	300
31	ポスター（睡蓮）	800
32	ポスター（カラス、ポプラ）	500
33	かさ	900
34	キーホルダー	350
35	便箋	350
36	封筒	150
37	ストラップ	800
38	ミニフレーム	900

編集後記

うすべに色の春がやってきました。この素晴らしい季節にゼフュロス第５号をお届けできるのも、皆様のご協力のお陰です。素人編集委員一同感謝しております。西風やはらはら乱る花あかり…百花繚乱。上野の杜はこれからが旬です。な



モーリス・ドニ
(1870−1943)

《クァトロ・トルリ城、シエナ》
油彩・カルトン　43.4×35cm

モーリス・ドニは世紀末から今世紀初頭にかけて活躍したフランスの画家である。1880年代には僚友のボナール、ヴュイヤール、セリュジエ、ランソンらと「ナビ派」のグループを結成、その後は、装飾的、平面的で絵画性に溢れた様式で多くの作品を制作した。ドニの作品の多くは、静かな日常の光景のなかに、ほのかに神秘的な感覚を漂わせた作風が基調となっている。そこには、世紀末を彩った象徴主義の大きな影響を見ることができるかもしれない。
この《クァトロ・トルリ城、シエナ》は、とりわけ南欧の光と風土を愛した画家が、たびたび訪れたイタリアをモティーフに描いた作品のひとつである。古都シエナの郊外、14世紀頃に建てられた古い城砦を背景に、美しい果樹園のなか、跪いて祈る修道服姿の人物が描きだされている。紫や黄色、緑の柔らかな色調が快く響く明るい画面に宗教的な歓喜が静かに広がっているのは、ドニならではの境地と言えるだろう。

ダニエル・セーヘルス
(1590−1661)
コルネリス・スフート
(1597−1655)

《 花環の中の聖母子 》
17世紀前半
油彩・板 77×53.5cm

17世紀になってはじめて、静物画は重要な絵画ジャンルのひとつとして広く認識されるようになった。イタリアでも試みられなかったわけではないが、風景画と同じく、この分野で主導権をとったのはオランダやフランドルの画家たちだった。ヴァニタスの寓意をもつものから、花や事物それ自体の描写が目的となっているものまでさまざまな作品が制作された。カトリックの側にとどまったフランドル地方(現在のベルギー)では、この新しい絵画ジャンルと宗教主題とが結びつき、静物画的要素をもった新しい宗教画が誕生した。本作品に見られるような、宗教主題の周囲に花環を配した作品がそれである。宗教主題は多様であったが、とりわけ好まれたのが聖母子であった。花環には聖母子への献花といった意味も込められていたのだろう。
本作品は花をダニエル・セーヘルスが、聖母子をコルネリス・スフートが描いたものである。こうした分業は当時しばしばおこなわれたもので、中には聖母子をルーベンス、花をヤン・ブリューゲルが受け持つといった豪華な顔合わせもあったが、基本的には花が主役であり、あくまでも花の絵と見なされていた。

ティツィアーノ

悔悛するマグダラのマリア
1560年代
油彩・カンヴァス　119×97cm
©The State Hermitage Museum, Saint Petersburg

● **誌名について**

「ZEPHYROS」(ゼフュロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS 国立西洋美術館ニュース
ゼフュロス

ZEPHYROS　第5号
印刷発行日　平成11年3月10日（年2回発行）
編　集　国立西洋美術館
印　刷　株式会社　稲元印刷
発行者　財団法人　西洋美術振興財団
〒110−0007　東京都台東区上野公園7-7
国立西洋美術館内
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135